是々非々の人
── 加藤雅人先生のご退職に際して ──

竹　内　　理

加藤雅人先生が、この３月に関西大学をご退職になる。定年延長も、特別契約教授の任期も、すべて満了されてのご退職となる。しかし、総合情報学部から外国語学部と駆け抜けてきた長年の同志がまた一人いなくなると思うと、寂寥の感が否めない。

先生とは、今からおおよそ30年前、私が総合情報学部の助教授（准教授という職位すらないほどはるか昔）として着任した時以来のお付き合いとなる。文理融合を謳った同学部は創設２年目であり、今では考えられないことだが、すべてが混沌としていた。文の考えを理は理解できず、理の考えに文が驚くということもあり、（あうんの呼吸などなく）何事も１つひとつ細かなルールを作っていかねばならない状態だった。その中で、どっぷり文系の出身であったにも関わらず、常に是々非々を貫き、公平な主張と判断を心がけておられた加藤先生は、カッコよくもあり、大学人として見習うべきロールモデルのような存在であった。

そんな先生だが、博士論文をご著書にされた『ガンのヘンリクスの哲学』（創文社）を私にご恵投くださった時、「これは清水の次郎長、つまり清水に住んでいた次郎長さんと同じで、ガン（ヘント）という場所にいたヘンリクスさんという人の哲学の話やねん」（大阪弁で話されたかどうかは定かではないが）と、高尚な哲学の入り口を素人の私にわかるよう、茶目っ気たっぷりに説明してくださるようなところがあった。こんな先生だからこそ、学生から慕われ、ご担当の講義やゼミは、常に高い人気を保っていたのであろう。

その後、私の外国語教育研究機構への学内移籍があったため、しばらくは親しくお話するチャンスには恵まれなかったが、10年余後、外国語学部の立ち上げでご一緒する機会を得ることとなった。総合情報学部に続いて、再び新しい組織の立ち上げでご一緒できるとは、奇しき縁といわざるをえない。当時、学部の運営方針を巡り、色々な考えを持つ人たちがおり、今の状況からは想像のできないほどの緊張感が漂っていた。そして、どういうわけか、先生と私は違う考えを持つグループに属する人物と考えられていた。そんなこともあって、なかなか公の場でお話することができない状態にあった。しかし、総合情報学部で「同じ釜の飯を食った」間柄であり、この状況をなんとかしなければならないという義侠心（？）のような気持ちから、

お互いに密かに連絡を取り合い、落とし所を探るようなことをしていたのだった（もう時効ですよね、加藤先生）。どのように「密かに連絡」を取ったのかは、酒席のネタとしてまたの機会にとっておくが、その甲斐もあってか、見事に外国語学部が動きだしたのは、先生の是々非々の判断があったおかげだったと、今でも深く感謝している。

その後の先生のご活躍は記憶に新しい。学部の成否は就職で決まると（世間では）考えられるため、独自のキャリア委員会の設置を当時学部長であった私が独断で決めたのだが、それを先生は後押ししてくださり、次々にアイディアを出して、学生の就職活動を強力に支援してくださった。学生のためになると判断されたら、持ち前の是々非々の精神で、自らの時間を削ってでも必要なことはすべてされる。そういう先生のおかげで、先輩が一人もいない状況での一期生の就職活動が見事に成功し、さらに、その後の就職先の選択肢拡大も成し遂げることができた。この功績は末代まで（決して大げさではない）語り継がれるべきことだ、と私は思っている。

そんな是々非々の人、加藤先生が、いよいよご退職になる。ご退職後のプランについても少しお聞かせ頂いているので、新たな門出として祝福しなければならない。しかし、どうしても悲しく、涙腺が緩んでしまうのは、それだけ外国語学部が、そして私が、加藤先生を頼りにしていたからだろう。

先生、あなたの残したものは、確かにこの学部の基盤となって生きています。ありがとうございました。どうかお体を大切に。